

第8話 生まれて初めて「プロ」のロックなコンサートへ行く の巻

春先のSARS騒動でお流れになった、サントナの公演に行ってきました。めぐさんのお誘いで思いがけない経験をさせていただけそうです。

待ち合わせは『東京駅丸の内中央口』実は私、良く考えたら丸の内に電車でいったことがありませんでした。いつも母を迎えに車で丸の内に行っています。丸の内に出口がいくつもあることすら知りません。それでも築地のコンサート(The Loose & Beatが出演)の時も車で行って、めぐさんと無事落ち合えましたから、心配無いと高をくくっていました。東京駅に着いたのは約束の10分前、ご存知のとおり私は携帯を持っていませんから、遅刻はご法度です。「丸の内中央口」という標示のエスカレーターに乗りました。非常識に長い下りのエスカレーター、「しまった地下に連れて行かれる」案の定着いたのは地下の丸の内中央口。地上に出るべく最寄りの階段を駆け上り、出ました、はとバス乗り場。中央口に急ぎます、ところがここだと思っていたところは北口、中央口を通り過ぎていきます。泣きたくになります。古めかしい建物を凝視しながら戻り、ステーションホテルの入り口の脇に、小さな中央口を見つけました。やっとめぐさんに会えました。今回もめぐさんを待たせてしまった。いきなりロックじゃない出だしです。

武道館の周りは人が溢れていました。座席ごとに入り口が分けられていて、人波に揉まれながら進んでいくと、持ち物の検査をしています。屈強な若者に「失礼します」などと言われたら、お断りできません。私はお咎めなしで無罪放免、めぐさんはデジカメを没収されました。圧倒的に年配の人が多いコンサートで、ちょっと安心です。以前夫とキューバの老人バンド Buena Vista Social Club を聴きにいった時、多くの人々が元気に立ちっぱなしで、こちらは気恥ずかしくて立ち上がるなど到底出来ず、居心地の悪い思いをしたのです。休憩なしの2時間のステージ、アフリカをモチーフにした曲を中心に、ヒット曲が並びます。「ヨーロッパ、ちょっと違っていたよ」後できしぼんに言ったら、演奏者は弾きこなすうちに、進化させるのだそうです。スタンドで固定されたアコースティックギターを、エレキを前にぶら下げたまま演奏する離れ業にはびっくり、筋肉質でカッコいいボーカルの若者に奪われがちな目をくぎ付けにさせてしまいます。イラクを意識してか(あるいは、混沌のアフリカか)平和のメッセージを伝えて、ロックじゃない感じ。へえー、急に親近感を感じる普通のおじさんに見えてしまいます。これには観客も困惑気味でした。ステージぎりぎりに立つ観客たちにピックをプレゼントして、カッコよくロックなコンサートは終了、めぐさんは一族が栃木と東京からこのコンサートを聴きに来ているということで、連絡に余念がありません。これが「例によって例の如し」の前兆でした。

めぐさんの従姉妹たちと合流して、そのまま車で新宿まで送ってもらえることになりました。四谷を過ぎたころ、めぐさん「デジカメ忘れた」、ハンドバックをひっくり返して預り証を捜します、「無いよう」と挫けるめぐさんをみんなで励まして徹底的に捜しました。しっかり者の私が付いていながら面目ない、大失敗です。緑色の預り証ありました、忘れ

る人が余程多いのでしょうか、忘れた場合の連絡先も書いてありました。連絡が取れて一安心。私たちのお出かけに「順調」や、「円滑」という状態は無いのでしょうか、必ず後戻り、一回休みが、あるようです。

翌日篠ちゃんのお嬢さんが、上野の大学で行われる作曲科の発表会にご招待くださったということで、おじさんバンドのメンバーである真澄さんに車で連れて行ってもらう途中武道館寄ってもらって、めぐさんデジカメを無事回収出来たそうです。やれやれ。

付録私の考えるロックな精神、スタイリッシュ、クール、怒っている、ぶすっとしている。



どこがサンタナじゃい^^;;